

高等学校3年間の国語「現代文」の授業

— 学習者はどのように受けとめたか その1「作文の授業」について —

金本 宣保

1999年度に高等学校を卒業していく生徒全員に、「高等学校3年間の現代文の授業をどのように受けとめたか」を問う文章を書かせた。生徒が書いた文章は、あらためて「国語の授業とは」と、考えさせられるものであった。ここでは作文の授業について述べたものをまとめた。作文が不得意だと意識している生徒も、指導者の作文を書かせる意図を理解して学習をしていた。作文を書くことが得意な生徒で、国語の授業の意味、また、作文を書くことの意味を、述べているものもあった。

(1)文章を生きたものとして読む力を養う。(2)書くことによって自分の考えを明かす。(3)表現する喜びを味わい、読み書くことを生涯の楽しみとしたいという意欲を養う。

それらの目的を達成するために、それぞれの生徒が自覚して学習してきた。

1 生徒の作文「高等学校3年間の現代文の授業で記憶に残っていること」

1997年度高等学校1年として入学し、1999年度に高等学校卒業した生徒全員を3年間「現代文」を授業してきた。

1997年度 高等学校1年 「国語Ⅰ」4単位の中の
「現代文」の2単位分

1998年度 高等学校2年 「現代文」2単位

1999年度 高等学校3年 「現代文」2単位

最後の授業を迎えるとき、学習者は「高等学校3年間の現代文の授業をどのように受けとめたか」を問うために、以下の指示で作文に書かせた。

題「高等学校の国語の授業で記憶に残っていること」
なるべく具体的に 教材の題目
授業の場面

3年間続けて同じ生徒達に国語の授業を担当したことは今までもなくはなかったのだが、その生徒達に自分の授業についての作文を書かせたことはなかった。20分ほどの時間であったが、生徒達は私の予想以上にまじめに書いてくれた。提出させ読んだが、その内は楽しいものが多かった。一人一人に短い言葉を書き、次の授業、最後の授業で生徒に返し読んでもらった。

作文の内容は、あらためて「国語の授業とは」と、考えさせられるものであった。生徒へのこたえはそのまま私の「国語の授業とは」への考えである。

ここでは、作文の授業について書いていたものについてまとめる。

2 A組の作文から その1 作文を苦手だと意識しているもの

A組について整理をしてみよう。A組は男子25名女子15名計40名中作文の授業について書いた者は8名であった。

はじめに作文を苦手だと書いたものから。

生徒 a

現代文の授業といえば「本読み」だと思う。四年のときに僕が本読みをしていたら、止められた。今だに(ママ)友達から言われる。死ぬまで忘れないような高校時代の思い出(?)となりそうだ。

次に印象に残っているのは作文だ。早く書き終わって顔を伏せていると、僕の作文を読んで授業の終わりに「君の作文は表面的すぎる」と言われた。

最後に定期テストは平均点がなかなかとれなかった。もっと分かりやすい問題にしてくれれば…。

指導者のこたえ

『もっと分かりやすい問題にしてくれれば…』高い平均点になるから同じこと」

考察

「指導者のこたえ」は、最後の授業で生徒に返し読んでもらった文であるが、それについての説明を考察として述べる。

生徒 a は授業中よく眠る生徒であった。「四年のときに僕が本読みをしていたら、止められた。」とあるのは、なにも考えずに「字だけ」読んでいるから、きいているものには、意味が分からなくなる。それを、私が注意したのである。この生徒にとって、だいたい私の授業がよく分からないままであったが、この後、本読みを止めた理由を前にも言ったはずだがと説明し、時々話をした。

a 「マークなら点がとれるんだ。」

私 「このごろは、授業をきいているからだろ。」

a 「どうかなあ。実力。」

私 「でも、記述はだめだよ。」

周りできいている生徒も笑っていた。気持ちよく別れることができた。

生徒 b

私は考えを文章にすることが苦手でもともと嫌いだったが、単元がおわって文章を書くのがとても苦痛でした。特に「ノモスとカオス」とかよくわかっていなかったこともあり、さっぱりわけのわからない文章を書いてしまいました。最近では少し慣れたこともありあまり苦痛には感じませんが、論理の展開のしかたとかがやっぱり下手で、みんなが読むのをきいていつもただ感心するばかりです。

指導者のこたえ

「苦痛を通して学んだわけです。実は、書くときよりも、書く以前が大事。」

生徒 c

中学 1 年の時、私は金本先生に現代文を覚えてもらったのですが、その時、先生の授業がわかりませんでした。黒板が単語の羅列に見えまし。多分ハイレベルすぎたのだと思います。高校になってやっと先生の授業が分かるようになって補習にもたまに出て、先生の授業はおもしろいと思うようになりました。一つの単元が終わって感想文を書くのはとても難しかったです。でも、私が書いたものが受け入れられるのは、自信になったし、よく考えることは大切なことだと分かりました。

指導者のこたえ

「期待して作文を読ませてもらったし、その期待に応えてくれました。」

生徒 d

国語は楽しみな授業でした。今でも国語の時間は一番よく考える授業で、自分が解釈していたことと違うことを言われると新しいことを発見したようで、またそこからいろいろ考える糸口となります。ただ作文の時だけはとても気が重たいですが。

指導者のこたえ

「私が言う前に『解釈していた』ことが大事なのです。だから、『考える糸口』となったのでしょう。」

考察

作文が得意な生徒だと指導者が評価していても本人は「苦手でもともと嫌いだったので、…とても苦痛でした。」「とても難しかったです。」「とても気が重たい」と思っていたのだと知った。

b は、苦手だと言いながら、しかし、「単元がおわって文章を書く」ことを、考えていて「よくわかっていなかったこともあり、さっぱりわけのわからない文章を書いてしまいました。」と、指導者の作文を書かせる意図を理解して、学習していたのである。

生徒 d は「今でも国語の時間は一番よく考える授業で」と、指導者の授業のねらいは理解し、身につけている。

生徒 c のように中学時代のことに触れる生徒がいて中学校から当校に在籍していた生徒たちが中学 1 年のとき週 2 時間教えていたことを思い出した。やっと、高校時代になって、分かってもらえたらしい。すぐに分かるように工夫をしているつもりなのだが。

「私が書いたものが受け入れられるのは、自信になったし、よく考えることは大切なことだと分かりました。」とあるように、自分の作文を教室で皆に発表させることは、学習の自己評価になるし、次の学習への動機づけにもなる。b が「みんなが読むのをきいていつもただ感心する」と言っているように、自分が同じ課題で書いた後には、他の生徒の作文の評価がすぐにできる。

3 A組の作文から その2

作文がうまく書けなかったもの

生徒 e (部分)

確か「知識活動の」で作文をどう書いていいのかわからなくてよく理解できなかったのだろう。人の作文を聞いてああ書けばよかったのかと思い、それからどんどん考えが出てきたが時すでに遅しとても悔しかった。

・表現する喜びを味わう。

h 「自分で何か書くことのおもしろさ難しさを実感することができた。文章を書くたびに、心の奥底で思っていたけれど、うまく表せなかったことが、未熟でありながらも、なんとなく拾い上げることができたような気がした。」

・生涯の楽しみとしたいという意欲をもたせる。

g 「将来は、時間に余裕があれば本業のかたわら本の一つも書けたらなあと思ったりもしますけど、」

文学方面に進むというのではなく、理学部を自分の進路として、書くこともできたらと願っている。それが実現するかどうかは、ともかく、そういう願いを語ることができるのがよい。

5 B組の作文

B組は40名中作文について書いた者は10名であった。

生徒 i

3年間の授業において一番記憶に残っていることと言えばそれは「よく作文を書かされた」ことです。僕は文を書くことが苦手であったので少しつらかったです。いつも書き出しに困るのです。それで授業中に書き終えることができなくて、よく先生のところまで作文を持っていきました。でも授業に作文を書く機会が多かったことはとてもよかったと思っています。書き出しは困るけど一度書くことが決まると比較的よく筆がすすんだからです。そんな時は書くことが楽しかったです。書くことがどうしてもまとまらず、あまり真剣に取り組めないこともあったけど、多くの場合は一生懸命書けたと思います。「書く」ことは社会に出てからも大事であるし、苦手なことに投げやりにならずにこれたのは本当に良かったです。そして、そのような機会を下さった先生に本当に感謝しています。

指導者のこたえ

『「一度書くことが決まると比較的よく筆がすすんだからです。そんな時は書くことが楽しかったです。」それを味わってくれたことがうれしい。』

生徒 j (部分)

「こころ」は、夏の感想文の題材として読んでいてそのときはよく理解しきれていなかったが、先生が絵を描いてくれたりしKと「私」の心の中でのやりとりが「そういうことだったのか」と納得できました。

指導者のこたえ

「やはり、授業は一人で読むのとは違うんですね。」

生徒 k

現代文の授業といえば、作文というイメージがある。普段の授業は睡魔と戦いながら受けていたが、聞くという受け身の姿勢であったから、楽であった。しかし、作文となるとそうはいかず、自分で考えて論理立てて話を作らなければならなかったのしんどかった。少しは文章力がついたと思う。

指導者のこたえ

「楽 → 眠い

自分で → しんどい → 学力がつく」

生徒 l

小説の授業も楽しかったが、最近ということもあって小林秀雄の授業において正宗白鳥との「思想と実生活論争」の作文が記憶に残っている。数学や理科が苦手であるのにそれ以上に文章を書く(作文にしてもテストの答案にしても)ことが苦手だったから理系を選んだ私が、みんなの前で読んだ唯一の作文が小林秀雄の作文であった。三年間ありがとうございました。

指導者のこたえ

「いい文章でした。はじめは名前が読めなくてごめんなさい。」

生徒 m

「現国の授業で作文を書くこと」このことがこの3年間どれだけ私を苦痛にしたらろう。4年生の時はほとんど何を書いたらいいのか全く分からずいつも遅れて出したり最後まで書けなかったけれど、6年になって2回作文を読まされたことがとても私は嬉しかったです。全然上手になったというわけではないけれど、自分の思ったことが文章で表せるようになったことが3年間の成果かなと思います。

指導者のこたえ

「私の中では〇〇さんは、作文が得意だと思ひこんでいます。」

生徒 n (部分)

「舞姫」や「こころ」の時の、「登場人物になったつもりで書く手紙」が特におもしろかったです。普通に感想文を書かせられても、小説の感想ってどうもこじつ

けっばいことしか書けないので、他人の書いた文章を聞くのも楽しかったです。普段「この人はどんな文章を書くひとかな」なんて思っても、なかなか知る機会がないので。それと、先生の授業は「この人は本当に文章がすきなんだなあ」という感じがします。例えば入川先生の数学の授業や広沢先生の日本史の授業もそういう感じでした。やっぱり授業を受けるなら、その教科が本当に好きな先生の授業を受けるのが一番楽しいです。

指導者のこたえ

「文章が好きです。」

生徒o

それは文学についての小論を書くという課題でした。できた人から解散だったので一人また一人と教室から出て行って、残り五人くらいだったとおもいます。その時の私は、思っていることを人に明確に伝えるような、それでいて個性があり、「いい文章」だと思わせるような文章を書こうという無理な野望に燃えていました。できたものはさんざんだったことは言うまでもないことです。しかし、自分で読み返してもよく分からないというありさまの私の文章を、金本先生はざっと目を通しただけ（のように見えた）で私の言いたかったことを言葉にして、「～ というのが言いたいんでしょ。」と言われた。その時から金本先生への尊敬の念は、他の先生に対するそれよりも異質なものになりました。

指導者のこたえ

「そんなことがありましたか。うれしい文章です。」

生徒p（部分）

「栗の樹」の「ヒットラーについて」のところも楽しかったです。（作文書きたかった。）6年（近く）の間お世話になりました。何十年後に、夢が叶って、私が童話作家になれたら是非作品を読んで下さい（笑い）。

指導者のこたえ

「読ませて下さい。」

生徒q

「城の崎にて」が一番印象に残っています。はじめは情景を描いただけの文章としか思わなかったけれど、授業を受けたら作者の感情がおりませられていることが分かって感動しました。授業の最後に書いた作文が今までの中で一番できがよかったです。でも、もう「城の崎にて」を読んでもあのときの納得した感じは思い出

せません、小林秀雄が「一言芳談抄」を後から思い出しても、寺での感じがつかめなかったように。これからは、小説をこんなに詳しく解釈することはいはないとおもうけれど、自分で小説を読む時も「城の崎にて」の授業のときのような感動を味わってみたいです。

指導者のこたえ

「まさに、文学は、（授業も）一回きりの体験です。いい文章を書いてくれました。」

生徒r

一番印象に残っているのは、「舞姫」の授業です。

初めてテープで聞いてすぐに感想を書いた時、寝ていて聞いてなかったわけじゃないけど、頭に何も残ってなくてかけませんでした。

だけど、授業を受けて教科書に沢山書き込みをしているうちにどんどん内容がつかめてきて授業を受けるのがとても楽しくなっていました。私にとって「舞姫」の授業が一番おもしろくて早く次を読みたいという気持ちで受けることができました。

指導者のこたえ

「君にとって『舞姫』の授業が、意義のあるものだった、とうれしく思います。」

考察

全体を羅列したが、生徒qの「授業の最後に書いた作文が今までの中で一番できがよかったです。でも、もう『城の崎にて』を読んでもあのときの納得した感じは思い出せません、小林秀雄が『一言芳談抄』を後から思い出しても、寺での感じがつかめなかったように。」という文章は高等学校1年の学習を思い出している。このように授業を受け止めてくれた生徒があるのだと、喜ばしく思った。

6 C組の作文

C組は代表的な作文4つ報告する。

生徒s

僕は今、国語が好きです。以前は読書だけ好きでした。というのも、中学の授業では、今一つ読書と授業がつかないからです。しかし、金本先生の授業では「山月記」や「ころ」で情景の描写に登場人物の感情を読みとることを教えてくださり、新鮮な驚きを感じました。そこで読書と国語とがはじめてつながりました。他に、単元ごとの作文では感想や自分の考えを文字にす

ることができ、人と文章について話したりすることがない分、とても楽しかったです。テストとはそこそこしかとれないけれど、高校時代の自分の考えを残すことができ、自分流の文章の書き方が確立してきたことが何より役立つ、3年間の国語の財産です。

指導者のこたえ

「君の場合、
読書→国語とつながり→自分流の文章の書き方
でしょう。作文の背後に学力（大きな意味での）を感じさせられました。」

生徒 t

僕は「思想と実生活論争」の正宗白鳥と小林秀雄の教材が一番心に残っています。日ごろ活字に慣れていないこともあり、評論文は現代文の中でも特にとっつきにくいと感じていた頃は最初この教材を恐れていました。抽象的な事柄が読んでも分からない考えても分からない、という理由からだと思います。最終的には、二人の表現していること全てを理解したというまでにいかなくても、自分なりに理解して解釈をつけられたように思います。最後の感想文では、このことをふまえた上で自分なりの結論がまとめられて、その過程がとても楽しかったです。

指導者のこたえ

「学力がついたということでしょう。感想文はいい文章でした。」

生徒 u

三年間でただ一度だけ自分の感想文を読む機会が2学期にあり、その時のことが自分で中では最も記憶に残っています。ただそれは自分の作文がよかったとかいうのでなく全員読むというだけのことでしたが、あの時ほど自分の作文を何度も読み返して修正したことはなかったと思います。僕の考えでは、作文というものは日本語にしる英語にしる難しいものだと思うのです。自分の考えをある言葉に表すというのは非常に難しいと思います。

指導者のこたえ

「もう少し多く読んでもらえばよかったですね。」

生徒 v（部分）

河合隼雄さんが一番印象に残っています。自分の書いた文章を読んで、それについて先生に質問され、自分の考えを言ったのですが、自分の内面のことだったので、すごく緊張しました。

指導者のこたえ

「いい体験として残っていることをうれしく思います。」

考察

s と t とは、作文が国語の学習の中で成立してく過程が明かに表されている。u と v とに、作文発表の緊張が書かれているが、発表をきく生徒も緊張するし、指導者も短いコメントをするが、適切な言葉を求めて緊張する。

おわりに

思い出を語って、「あのとき父の作ってくれた〇〇は、おいしかった。今も、……」という類のものがあが、それなら、母親が、毎日作ってくれた食事はどうなっているのだろう、その食事が自分を育ててくれたのに、ということを私はよく言ってきた。手記とかアンケートへの答えとかで、語り手が本心で語っていても、その言葉は、事実の総体を表していないのはもちろん、事実の大事な部分を表しているということもまれであろう。「記憶」は、妙な引っ掻き傷のようなものに固着する、傷は体の一部の小さな薄い表面なのだが、そこに意識が集中される、というようなことがある。その向こうにあるものを見定めることができればよいのだが、それはなかなか難しい。

「授業についての作文」などというものは、そのまま本当だとは思えない。しかし、今回は書かせてみようと思った。学年の生徒の顔を思い浮かべていいかなと、思った。その感じ方は誤りではなかった。作文を一人一人に返して「指導者のこたえ」を読んでもらい、こういうことを述べた。

「これは発表はしてもらいませんが、全体についてひとこと。

楽しく読むことができました。腹が立つことを書くものもあるが、それは仕方がない、と思っていましたが、そういうものはまったくありませんでした、ありがとう。褒められて照れくさく思われるものがありました。元気になりました、これからも…なんて。

そのままに受け止めさせてください。」

笑いの中で授業の最後を終わった。生徒の作文は、思いの全部を表してはいないだろうが、嘘を書いているわけではない。そして、私にとって意外だったのだが、単なる思い出ということだけでなく、授業について正当な指摘が多く、なるほどそうだ、と思わされることが、多かった。その中の「授業における作文」に関係したものを記録した。